

淡水真珠生産機能回復研究

久米 弘人

◆背景・目的

真珠漁場の環境変化を把握するため、主要な漁場である西の湖、堅田内湖、赤野井湾で水質と真珠母貝成長のモニタリング調査を実施した。

真珠母貝生産は現在、養殖業者自ら行っている。ラッドに代わる寄生魚を検討するため、ワタカとヨシノボリで寄生試験を実施した。

◆成果の内容・特徴

- ・西の湖、堅田内湖、赤野井湾および当场試験池で各月1回水質調査を実施した。
- ・西の湖、堅田内湖、赤野井湾および当场試験池に2歳貝を25個体垂下し、2ヶ月毎に殻長を測定した。5月から翌年1月までの8ヶ月間の殻長の成長は堅田内湖で31.8mm、西の湖で29.1mm、赤野井湾で22.6mm、水試池で8.9mmであった。とくに堅田内湖と西の湖で良好な成長となった。(図1)
- ・ワタカ(平均体長 65.5 ± 8.9 mm)とヨシノボリ(平均体長 44.7 ± 3.9 mm)を各20尾ずつ同一濃度のグロキディウムに15分間寄生させたのち、6日間30Lパンライト水槽で止水飼育を行い、6日後の鰓への寄生率を調べた。飼育中の寄生魚の生残率はワタカは100%、ヨシノボリは27%であった。15分後の体長あたりの鰓への寄生率はワタカで0.2~0.6個体/mm、ヨシノボリで1.1~1.9個体/mmで、6日後の寄生率はワタカで0個体/mm、ヨシノボリで1.3~2.2個体/mmであった。グロキディウムの寄生魚としてヨシノボリのほうが寄生率はよかったが、飼育中の生残率を高める必要があった。

◆成果の活用・留意点

- ・真珠漁場環境および母貝の成長を引き続きモニタリング調査をする必要がある。
- ・ヨシノボリへの適正な寄生量、寄生後の生残を高める飼育方法を検討する。



写真1. 寄生6日後のワタカの鰓



グロキディウム

写真2. 寄生6日後のヨシノボリの鰓

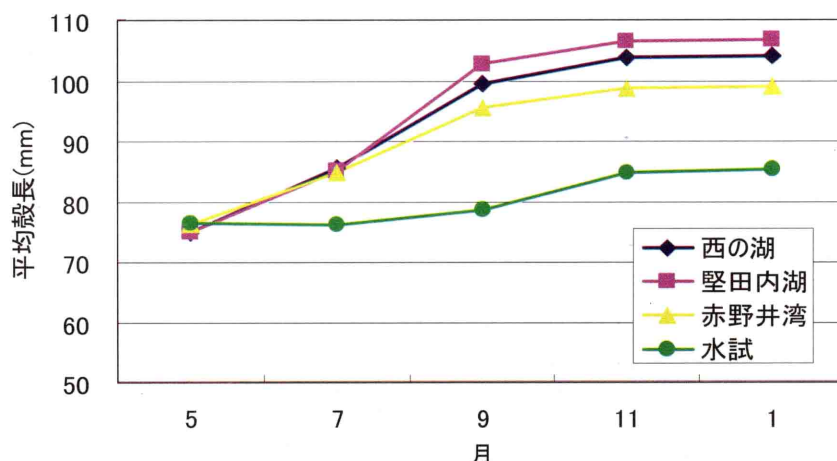


図1. 真珠母貝の漁場別成長比較